

六^あ連^ん銭^{せん}

長野市指定有形民俗文化財

松代焼



りよく ゆう なかし ききょう がた ちゃわん
緑釉流桔梗形茶碗



りよく ゆう ながしくち つき つぼ
緑釉流口付壺

松代焼とは

松代焼は、今からおおよそ二〇〇年前の江戸時代後期から昭和初期までの約二〇年間、松代周辺の複数の窯で焼かれたやきものです。おもに甕・すり鉢などの日常に使用される生活雑器から、花器や香炉などさまざまな作品が各窯から生みだされています。

松代焼の特徴は、重厚で固く焼きしまり、素朴ながらも味わい深いものが多いことに加え、独特な青緑色の美しい色は、松代周辺の土に含まれる鉄分と釉薬とが反応してできる自然の発色で、これが魅力のひとつになっています。そして、窯に関する文書史料が残されている全国的にみても珍しい地方窯で、この多くは松代焼創始にかかわった、藩の御用商人である八田家に伝来しています。もともとそれぞれの窯の名称で呼ばれていましたが、昭和の初めにこれらの総称として「松代焼」と呼ばれるようになったといわれています。

その歴史は、文化十三年（一八一六）に松代藩でおこなわれた殖産興業政策の一つとして、東寺尾の名雲、東条の天王山に藩窯が築かれたのが始まりといわれ、昭和初期に廃窯になるまでの間に、あわせて七窯が営まれていました。藩窯として始まった松代焼は、しだいに民窯へと広がっていきませんが、これらに大きく影響され松代以外の北信地域にも多くの民窯が築かれました。松代焼は、まさに信濃を代表するやきものといえるでしょう。

しかし明治に入ってからは、鉄道開通とともに大量の磁器や陶器が安価で流通したため、松代焼はしだいに衰退し昭和の初めころにはすべての窯が廃業します。北信濃のやきもの産業の中心といえるほど盛んだった松代焼ですが、現在の窯跡は畑や宅地化などにより当時の様子をうかがい知ることはできません。しかし、昭和三十三年（一九五七）郷土のやきものである松代焼を復興しようという愛好家が集まって松代焼保存会が発足します。そして、複数の収集家により集められた各窯の陶片や残された製品などをもとに研究を重ね、再び窯が築かれました。さらに松代焼を世に広めようと多くの展示会も開催されました。現在は、北信地域周辺に多くの窯が存在し、松代焼のさまざまな作品を楽しむとともに、あたらしいやきものの製作が盛んにおこなわれています。



松代焼

— 200年の煌めき —

現在つくられている製品は独特の青緑色のものが大多数を占めています。当時は生産された時代と窯によりその特徴はさまざまでした。代表的な五つの窯の歴史とともに、その特徴や松代町内に広がっている窯跡の場所などを紹介します。

寺尾名雲窯 (嘉平治窯) A

文化十三年（一八一六）、松代藩により東寺尾の名雲と東条の天王山に二つの窯が築かれました。

寺尾名雲窯は、藩の産物御用掛で御用商人でもあった八田嘉右衛門の総支配のもと、産物方役人中島三右衛門により京都から陶工が招かれ藩窯として開かれました。後に続く荒神町・代官町窯とは異なり、灰釉・鉄釉が多く使用されています。文政の初めころには閉窯して荒神町窯へと経営が移ったといわれています。

古い記録によると、寺尾名雲窯が操業を始める前の寛政年間（一七八九〜一八〇一）に、東寺尾の嘉平治が唐津にて修行のうちに東寺尾の名雲に窯を築き、素焼きの藍甕を焼いたとの伝承もあります。この窯は嘉平治窯と呼ばれています。

天王山窯 B

天王山窯は、寺尾名雲窯と同じく文化十三年に普請奉行上村何右衛門が係となり、信楽から陶工を招き藩窯として開かれました。寺尾名雲窯と同様に灰釉・鉄釉を使った製品を中心につくられましたが、操業期間は二年あまりだったといわれています。

荒神町窯 C

寺尾名雲窯を閉じたのちに開かれたのが荒神町窯です。文政年間の初め（一八一八頃）に、荒神町の船会所（千曲川通船発着所）の裏に藩窯が築かれました。名雲窯と同じく中島三右衛門により営まれますが、文政八年（一八二五）藩の財政悪化から八田家にその経営が引き継がれ、松代藩は窯の経営から手を引くことになりました。松代焼での民窯の始まりです。安政年間（一八五四〜六〇）に八田家から浦野与平に経営が譲渡され、常滑から陶工が招かれ営まれました。荒神町窯の特徴として大型製品には鉄釉がみられ、小型の製品は松代焼の特徴的な白濁釉と青緑色釉の製品がみられます。明治十五年（一八八二）頃に閉窯しました。

代官町窯 (岩下窯・加藤窯) D

代官町窯は天保十年（一八三九）、家老恩田頼母の指揮により代官町の藩士岩下革の屋敷地内に藩窯として築かれます。岩下窯と呼ばれ、日用雑器のほか茶器なども製造されました。その後、須坂藩十一代藩主の堀直格に招かれ作陶の指導をしていた、陶工吉向治兵衛の弟子、加藤房造が経営を引き継ぎ民営化されてからは、加藤窯とも呼ばれました。明治期の記録によると、窯は七室の有段連房式登窯であったとされ、よりはっきりとした青緑色釉のやきものが盛んにつくられ、昭和八年（一九三三）に閉窯になるまで続けられました。

寺尾山根窯 E

寺尾山根窯は弘化三年（一八四六）、寺尾名雲窯の西側にあたる山根に、この地で農業を営んでいた田中銀兵衛が美濃の陶工常四郎を娘婿に迎え、民間の手により開窯されました。荒神町窯や代官町窯の影響を受けたといわれ、青緑色釉の製品が多く生産されています。明治半ば以降に閉窯したとされます。

（文責 小山万里）

真田家とやきもの

松代藩八代藩主真田幸貫は、寛政三年（一七九一）白河藩藩主の松平定信の次男として生まれ、七代藩主真田幸専の養子となり、文政六年（一八二二）真田家の家督を継ぎました。幕府の老中を務め藩政改革を行った幸貫でしたが、文芸にも秀でて、絵や書などさまざまな作品を残しているほか、松代城花の丸御殿内に窯を築き、自ら作陶も楽しんでいました。

当時、各地の藩主に陶芸指導をしていた陶工の吉向治兵衛を招いて指南を受け焼いたとされる作品も

伝えられています。

このようにして焼かれたやきものは「御庭焼」と呼ばれています。



真田幸貫肖像画



真田幸貫御手焼 香合

長野市指定有形民俗文化財

松代焼コレクション



鉄釉一升德利 (寺尾名雲窯) A



うえきばち 植木鉢 (天王山窯) B



りよくゆうふたつきつぼ 緑釉蓋付壺 (荒神町窯) C



りよくゆうしんしゃゆうながしつぼ 緑釉辰砂流壺 (代官町窯) D



りよくゆうながしこねばち 緑釉流捏鉢 (寺尾山根窯) E

松代焼は、素朴な中にも味わい深く、またその発色の美しさからも、現在は美術工芸品としても多くの人から愛好されています。

真田宝物館が所蔵している松代焼コレクションは、複数の収集家が集めたもので、そのうち124点が昭和47年(1982)3月1日に長野市の有形民俗文化財に指定されています。指定品の中には德利、甕、壺、茶碗などから香炉まで各窯のさまざまな作品があり、松代焼の多様さと製品の美しさを感じられます。

たかが陶片されど陶片

考古学から松代焼を探る

松代焼は江戸時代後期に松代藩の御用窯として誕生しました。早くに成立していた大規模窯業地である肥前（伊万里・唐津、現在の佐賀県周辺）や瀬戸・美濃（愛知・岐阜県）、京、信楽（滋賀県）とは違い、地域に根ざした地方窯と称されるものです。

松代焼の諸窯については残念ながら発掘調査は行われていません。しかし窯があったとされる場所で採集された陶片を調査し様々なことが分かってきました。陶片とは採集された陶磁器のカケラのことですが、窯跡から採集された陶片には焼損じ品・窯道具・窯本体の破片があります。このうち窯道具とは製品を焼くために窯詰めする際に台にしたり、製品同士がくっついたりしないように間に挟む道具のことです。窯の系統により形や種類が異なります。地方窯の場合、多くは大窯業地から技術導入をしていますが、松代焼諸窯の陶片には信楽系の窯道具が含まれており、文書や記録等の「信楽から陶工を招いた」という記載と一致します。北信地域のその他の窯の中には肥前や瀬戸・美濃、常滑から技術導入したことがうかがえるものもあります。また中农信地域の窯では瀬戸・美濃系の窯道具が出土しています。長野県内の近世窯業は中农信地域では地理的に近い瀬戸・美濃から技術が導入され、北信地域はそれぞれの窯のツテをたどった様子が当時の記録や陶片から想像できます。

焼損じ品はただ失敗作というだけでなく、どのような種類の製品を作っていたか、どのように窯詰して焼成したのかを知る重要なカギです。窯詰めは陶磁器を作るうえでの成功と失敗の分かれ道、非常に重要な技術といえます。詰め方が悪ければ、窯全体に火が回らなかつたり、適切な温度にならなかつたりして失敗してしまいます。窯の構造に合った詰め方が必要になり、これも技術系譜を物語るカギなのです。

松代焼の製品の形や種類からは日用雑器といえど流行を意識して作っていたことがわかります。陶片を窯の年代順に見ていくと、褐色の鉄釉中心から乳白色と青緑色を主とするように次第に変化していきます。また当時難しかった磁器の生産も少量ながら行っていたことも確認されました。

考古学においてはこれら窯跡の資料を基準として、消費地で出土した遺物の産地や年代を判断します。長野市域の近世



甕 (善光寺門前町出土)

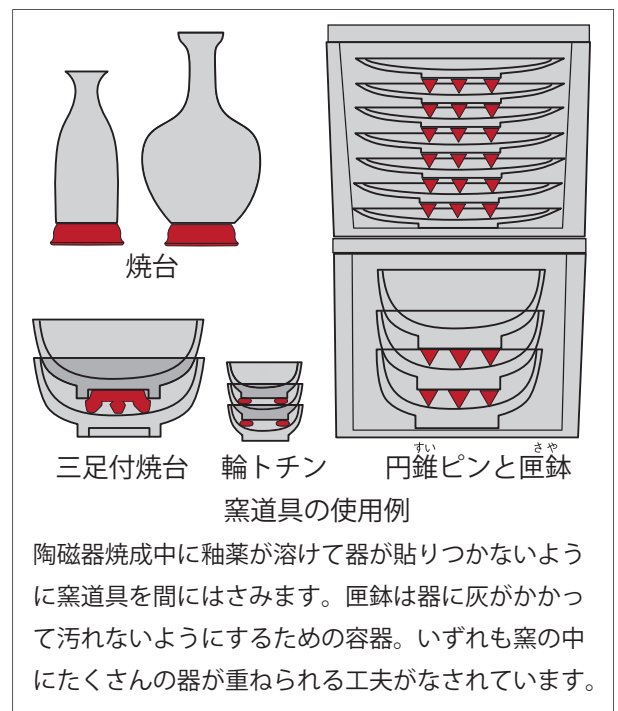
植木鉢 (松代城下町出土)

ひょうそく
乗燭
(善光寺
門前町出土)

箱庭道具 (松代城下町出土)



松代焼の窯道具



陶磁器焼成中に釉薬が溶けて器が貼りつかないように窯道具を間にはさみます。匣鉢は器に灰がかかって汚れないようにするための容器。いずれも窯の中にたくさんの器が重ねられる工夫がなされています。

遺跡で出土した陶磁器の構成を見ると、庶民の持つ陶磁器は量産品が多く、肥前か瀬戸美濃が主な産地となります。しかし裕福な商人や上級藩士ではそれに加え茶道やお香に使用するようなぜいたく品や上質な京焼が出土します。その中であって松代焼は身分の上下に関係なく使用されていたようで、善光寺門前町や松代城下町からごく普通の村まで、必ずと言ってよいほど松代焼が出土しています。松代焼は意外と広く流通していたのかもしれませんが。このようにただの破片である陶片からアプローチすることで、松代焼の歴史の一端を知ることができるのです。

(文責 長野市埋蔵文化財センター 田中暁穂)